

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2011 年度第 2 回研究会報告書

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 23 年度第 2 回研究会

日時：2011 年 05 月 7 日（土）午後 1 時 30 分から 6 時 30 分

場所：東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 共同研究員全員

「成果出版物について」

2. 木村可奈子（京都大学文学研究科 院生）

「明の対外政策と冊封国暹羅—万暦朝鮮役における借暹羅兵論を手掛かりに」

3. 吉開将人（北海道大学大学院文学研究科 准教授）

「20 世紀における苗族史論の展開と中国・タイ国史像」

報告の要旨

1. 「成果出版物について」

主査のダニエルスから、「叢書 知られざるアジアの言語文化」企画の状況について説明があり、その後全員で討論した。なお、ダニエルスは、本年度 4 月末に本研究所に対して黒澤直道共同研究員の『ナシ族の古典文学—『ルバルザ』・『情死のトンパ経典』』の出版申請を行ったことを報告した。（唐立）

2. 「明の対外政策と冊封国暹羅—万暦朝鮮役における借暹羅兵論を手掛かりに」

従来の研究では、漢字や儒教文化を共有しない東南アジアの国である暹羅は「冊封国」といっても、朝鮮などと異なり、中国を中心とした東アジアの世界秩序に政治的影響を受けているとは見做されず、明と暹羅（アユタヤ）の冊封関係は、中国史、シャム史双方で貿易のためと考えられてきた。しかし、『明實録』にこの冊封関係の定説に疑問を投げかける記述がある。万暦二十年の豊臣秀吉の朝鮮侵略の際、暹羅の朝貢使節が日本を倒すために出兵を請願したというのである。この事件は、ビルマからアユタヤを解放した救国の英雄ナレースエンの事績としてシャム史において注目を集めてきたが、中国史の観点からは検討されて来なかった。本発表では、暹羅の出兵請願の経緯を検討し、当時の明と暹羅の政治的関係を明らかにしようと試みた。

まず、朝鮮人申昉の『再造藩邦志』や当時北京に派遣されていた陳奏使鄭崐壽の『燕行録』等を用い、暹羅の出兵請願が暹羅側の自発ではなく、兵部尚書石星によって仕組まれ

たことを明らかにした。ついで、石星が暹羅の兵力を利用しようとした背景を考察した。当時の明人にとって暹羅は信用できない冊封国であり、総督兩広都御史蕭彦や元礼部尚書于慎行は借兵案に反対していた。確かに万曆までの暹羅は、明にとって決して従順な冊封国ではなく、さほど重要な存在ではなかった。しかし、ビルマによるアユタヤ併合、明の弱体化という時代の変化の中、両国の関係も変化していく。暹羅側では、朝貢し戦乱で失った国王印を再び獲得することで、明の影響力を何らかの形で利用してビルマからの独立を強化した。明側では破綻しかけていた国際秩序の維持のために暹羅に朝鮮、琉球に近い待遇を与えて厚遇し、海寇、緬甸という脅威に対しては暹羅の軍事力を利用した。少なくとも万曆以降、明と暹羅の間には政治的関係が存在した。万曆朝鮮役での暹羅の出兵請願という虚構は事実とされ、中国人の暹羅観に好意的変化をもたらした。(木村可奈子)

3. 「20 世紀における苗族史論の展開と中国・タイ国史像」

本報告では、「南方」が中国史像の形成にどのような影響を及ぼしたか、という関心から、20 世紀中国史について検討した。

「有史以前、黄河流域の先住者は苗（ミャオ）族であったが、あとからやって来た漢族によって南に追いやられ、苦難の道を歩むことになった。」このような考え方に立つ「苗族先住説」は、19 世紀以後、西欧人宣教師・西欧人東洋学者・明治日本の東洋学者・清末の在日中国知識人を經由して、中国大衆に伝播し、さらに近代教育を媒介に、苗族の知識人層にも波及した。中華民国の学術界では、歴史学・考古学・民族学などの西洋近代学術の受容にともない、「苗族先住説」を俗説として批判し、それにかわるものとして、「中原土着」の漢族・中国文明史像を構築していこうとする気運が高まるが、社会への根深い影響力は排除できず、ついには覚醒した苗族近代エリートたちによって、政治参加と地位向上を求める運動に援用されるようになる。さらに中国国外でも、19 世紀の西欧人東洋学者による「苗族先住説」の延長線上に、シャム国内で「シャム族南下説」が公定史観に採用され、日本の「南進」を背景に、重慶政府に危機感を抱かせるまでになった。そして「苗族先住説」は、今日の中国国内でも大きな影響力を持つに至っている。

以上のように、宣教師・東洋学者に始まる「奇説」が、漢族史から苗族史そしてシャム史と、それぞれの民族史像の形成に、「玉突き」状に作用したことがわかり、またそれを踏まえて今日の苗族意識の高まりについて見ると、それが 20 世紀を通じた歴史的経緯を背景にした構造的産物であることが明らかになる。

報告ではさらに、以上の報告内容を踏まえ、以下の提言と問題提起を行なった。

第 1 は、今回の報告者の研究成果はあくまでも苗族に主眼を置いたものだが、その過程で、「苗族先住説」が「シャム族南下説」と密接に結びついており、その鍵となるものとして南詔・大理国の主体民族をめぐる論争があることに気付いた。本研究グループは、タイ系諸族、彝族、白族、チベット系諸族の研究者をそろえているので、この議論の第三者的な学説史的再検討を共通課題に加えてみたらいかか。

第2は、今回、苗族近代エリートの政治参加を検討する中で、清末・民国末の西南少数民族の「改土帰流」問題が、同時期の北方の「盟旗制度」改革、そして中国内地の「県自治」制度導入の試行錯誤と、同時並行的なものであることに気付いた。この見方を敷衍すると、近代西南中国の「改土帰流」問題は、中国内地の前近代以来の「郡県／封建」「皇権／紳権」という議論の延長において理解する余地が生まれるのではないか。(吉開将人)

木村と吉開両氏の発表に対して活発な質疑応答が行なわれた。木村氏の発表については、議論が主にアユタヤ王朝と中国王朝の関係に集中した。まず、外国王朝は中国王朝の意図のみで行動するとは想定しにくい事実を考慮すれば、明王朝が確立した世界秩序は実態として存在したものなのか、観念として存在したものなのか、また『暹羅訳語』は果たして明代の原本であるかどうかといった点に質問が集中した。次に、これまでの研究からしてアユタヤ人＝現在のタイ人と同定する場合はその根拠を明示する必要があるとの指摘があった。その点に関連して、アユタヤ王朝の朝貢貿易にはどのような人が参加していたのかを明らかにすべきではないか、また洪武年間から万暦年間までの間に朝貢貿易の担い手と仲介役（例えば蕭彦や于愼行）などが交替していく中で、貿易で取り扱う品目が変わるのではないかと、さらに明朝は天順元年以降、中国西南部の土司に対して朝貢を奨励しないようにしたが、時期によっては朝貢の実態が異なる点に留意すべきではないかといった意見があった。

吉開氏の発表については、先ず、南詔・大理国とタイ族の関係、五族の解釈や苗夷民族などの用語について質問があった。その後、議論は多岐に渡ったが、吉開氏が提起した問題、特に改土帰流の比較研究提言に集中した。改土帰流は果たして中国王朝が外部にある政権を内地化する過程と見るべきかどうか、内地化と異なる場合があったのではないかなどの意見が提出された。(唐立)